のかはりに、四方あけ放しの家族和合のほがらかさは日本人の古くからの美点でもあつたのではないか。魏志倭人傳に其会同坐起に父子男女の別なしと記したのも大陸の居住に見られない、室内の自由さが目についたためでもあろう。特に其俗、婦人嬌せず、妬忌せず、盜竄もす、争訟少しとのべたのも平和に徹する日本人のほこらかさが古く注目された結果であらう。自から後の日本人の居室に於ても、堅苦しい鍵のかかるナンド構などを維持しなくなつた理由とも見られるではないか。家は單に其居住形式のみではなく、進んでその道德的影響までに考察をめぐらすべきではないかと思うのでこのことを付記する。（文学博士）

九 州 の 地 名

近 藤 忠

地名の研究の第1の困難は地名の蒐集にある。如何に小地域を選んだとしてもその際限ない地名を集めつくし得るものではなく、また小さい地名ほど却て興味深いものが多い。更に名称の蒐集のみでなくその場所の地理的事情をも理解せんとする困難が伴う。今まではとにかく小さい地域が選ばれ勝ちで、その地名の解釋に際しても往々こじつけに陥る弊が見られた。これに対して私は地名の蒐集を1:50,000の地形図に依ることとした。地形図は面積的に地形的に縮図であるばかりでなく地名の分布に於いても縮図であると見做す立場をとるからである。地形図上に於いて或る地方に或る地名が多いとすれば實際に於いても其の地方には其の地名が多いであらうし、少い地方は實際に於いても少いであらうし、また全然見当らない地方には實際に於いても其の地名は全く存しないか、あつても極めて少いであらうと考えるのである。

この地形図に依る方法によつて全國的に、或いは地方的に地名の分布図を画き得ると共に、不十分ながらもその土地の地理的事情も知ることが出来る。また或る地方に於ける或る地名の総数を決定し、更に發展させて使用文字の種類、附加文字の種類、或いは地方的分布数などについて、統計的に整理することも可能である。1:

50,000 の地形図の図幅を 1 枚づつめぐりながら丹念に地名を探し求める仕事は機械的な仕事のようにではあるが実はこの仕事の途中に於いて多くの問題とその解釋のヒントが得られるのである。決して他人任せであつてはならない。この仕事に於いては大都市名も山間僻地の部落名も平等に認められなくてはならない。また文字よりは読音が重視せられなくてはならない。例えば九州に於ける「ツル」地名は文字としては鶴、津留、水流、釣、都留、辻、弦、蔓等多数が当てられているが、其等をひとまず同種の地名として蒐集し、然るのち別系統の地名の混入を一々につついて吟味するのである。

従来地名の研究と言えどかく地名の意味の解釋を第一とするものが多かつた。地名の意味の解釋も重要ではあろうが、充分な分布その他の整理研究を経ずして、直にある地名の解釋を行うことはこじつけの危険に陥りやすい。書初から意味を解釋しようと思わなくとも地図をめぐりながら地名を探求して行くうちには思わず膝を叩きたくなる様な場合もある。九州で河岸に稀にはあるが猿渡なる地名が見当る。これなども昔猿が猿橋を架けて渡つた所などこじつけて解釋したい地名である。然るに宮崎縣にて早流渡と書いてサルワタリと読ませる地名が見当る。猿は早流かと思われる。西九州に多いものとしてコバ（木場、古場）地名があるが、これも後に述べるように宮崎縣では畑と書いてコバと読ませている。対馬との関係を思いあわせると古い時代の火田作の流れを推察しうるのである。

地名は地の名と言うよりは村の名、部落の名と言う方が適當な場合が多い。地名はその起りがその地の地理的事情に由來する場合が多いのは当然であるが、その外に人名、神事、村の生活等に由來する場合も少くない。地名は指す地域が時の流れと共に擴大し、縮少し、細分され、或いはまた移轉する。ある地名をそれが位置する現存の場所のみから解釋しようとするは無理が多い。一の地のみに見られて他に類型がないと言うが如き特殊な地名はめつたにない。また一見して千差万別の如き地名も実はその基礎型は左程多いものではない。我々はこの基礎型に注意し、其の基礎型の分布に注意し、その基礎型が如何に変化されているかに注意しなくてはならない。ここには九州に於ける地名の基礎型として有力と思ふツル、ムタ、コガ、コバ、ハエの五地名を選出した。この研究は此等の基礎型が如何に分布し、如何に変化しているかを明かにしたものである。

1 ツル地名 ツル地名は九州に特に多い地名であり、これに関しては既に拙稿（津留地名考）を発表したので、ここではそれとの重複を避けて新しい観点に立つて考究してみよう。1:50,000 の地形図より求められた九州全土のツル地名総数は 253、用字としては鶴 144、津留56、水流35、釣12、ツル 2、都留 1、辻 1、弦 1、蔓 1 である。鶴字は嘉名なるがために所謂ツル地名とは別種のものが混入していることも当然考えられる。別種の疑いあるもの。舞鶴(山鹿)、鶴見(別府)、鶴見岳(別府)、鶴見崎(鶴見崎)、鶴望(佐伯)、鶴木野(砥用)、鶴喰(日奈久)、鶴ノ羽(人吉)、鶴木山(水俣)、鶴丸(大口)、鶴掛山(佐敷)、鶴掛(佐敷)。

野尻図幅(宮崎)の水流口はスリグチと読み、大根占図幅(鹿児島)の水流はツイと読む。これは共にツルの訛化と思う。太宰府図幅(福岡)の辻(ツル)も珍しい一例である。これは恐らくツルなる言葉の元來の意味の忘れられた頃に道路が交叉して辻をなしたが、ツルの呼称はその後も続けられ、地名の意味の解らぬままに辻と云う文字を当てたものと推察する。

また單にツルと言ひ、他の文字を附加しない單獨地名は九州全土のツル地名中14%に当る。ツルとは河畔の沖積平野を指す言葉である(詳しくは拙著「津留地名考」を参照されたい)。その平野も開発が進まず、聚落数も

第 1 図

少い時にはツルなる單獨地名で不自由はなかつたであろうが、土地利用も進み部落数も増加すればツルに更に文字を附加してツル部落を區別して呼ばねばならなくなる。附加文字として第1に考えられるのは上・中・下である。河岸平野であるから流路に従つて上ツル・中ツル・下ツルなる地名が多く現れ、18%を占める。これに対して東西南北を附するものは3%に過

ぎない。ツル地名の性質からして方位によるよりも流路による区分の方が解り易いからである。地名区分に左右を附する例も稀である。臼杵図幅（大分）に左津留（ヒダシヅル）があるが右津留は見当らない。このヒダシヅルは右に対する左ではなくて九州・四國に多いカゲ、ヒナタのヒナタヅルの轉訛したものではあるまいかと思う。大小を附するものは6%を占める。尾の字が頭に附せられる地名はツルに限らず多数ある。私の感じでは小が同音なるがために轉じて尾の字となつたものではあるまいかと思う。尾の字を頭に附する地名からは何等末尾・末端等の意味は酌み取れないからである。植物名を附するものは12%を占める。中でも特に多く見当るのは桑ヅルである。動物名を附するものは極めて少く全土で牛鶴（甘木）唯一つしか見当らない。地勢に関する文字を附するものは17%を占める。地名であるからには当然の現象であり、それ等の文字としては坂、迫、河内、川間、沖、川、崎、山、原、野等が多いが、特に目立つて多いと言うものはない。その他には牧ヅル、ツル牧、ツル田が多い。例えば八代図幅（熊本）の弦巻なる地名はツル地名全体を知れば平凡な地名に過ぎないが、この地名のみから解釋しようとしても解釈し得る地名ではない。ツル田はツル地名中でも最も多い。然もツル田のツルには必ず鶴の字が当てられている。

ツル地名は大分・宮崎の兩縣を中心に福岡・熊本・鹿児島縣に互つて廣く分布する。佐賀縣になると数は少く、長崎縣には殆どない。即ち西九州の半島部に無く、九州胴体部、殊に豊後水道側の東部に多い地名であり、殊に最も多いのは阿蘇火山地域である。同じく平野でも沖積地の方がツルであり、台地上の方がハル（原）である。文字別の分布を見るのに鶴はツル地名の存するところ何処にでも見当る。津留と釣と水流とはその分布地域が概してまとまつている。津留は大分縣の大野川流域に多く、釣は筑後川上流の日田・森盆地に多い。水流は宮崎・鹿児島縣の南九州に限られる。水流の分布の北限界は臼杵から水俣にかけて中部九州を斜に引いた直線、

即ち阿蘇の火山地域と九州山脈地域とを境する構造線であるが、この線はツルに限らず多くの九州の地名の分布に於いて境界としての意義を有するものである。

2 コバ地名 コバとは元來の意味は森林中の開墾地を指すものであるらしい。コバ地名は 1:50,000地形図によつて九州全土で 147 を探し得た。木場 122, 古場 11, 小場 6, 畑 5, 木庭 3 である。対馬では焼畑のことを木庭作と言う。(木庭作については対馬島誌〔昭和 3 年, 対馬教育会編〕に相当詳しい説明がある。) 今日ではこの火耕法は廃止せられているが、維新前は盛に行われていた。火耕の風習と共にコバ地名が九州に流布せられたとは軽々しく断言は出来ないが焼畑と関連のあるらしい感じのする地名である。村所・神門図幅(宮崎)・加久藤・人吉図幅(熊本)で畑と書いてコバと読ませているのも興味深い。

單にコバと言うのみの單独地名は全体の 33 % を占め極めて多い。上・中・下を附するものは 10 %, 東西南北を附するものは 3 % に過ぎない。山間の部落を呼ぶ場合には方位によるよりも流路に従つての上中下の方が解り易いからであつてこの点ツルの場合と同様であ

第 2 圖

る。大小を附するものは 5 % を占める。植物名を附するものは 9 % である。コバは山地地名のことであるからさぞかし樹木名を附するものが多いであろうと考えられるが実際はツルの場合よりも少ない。ただ桑ツルは多いのに対して桑コバの多いのは同様である。その外に稗コバが比較的が多い。動物名を附するものは熊本縣南部の頭地図幅の鶴木場のみであるが、これを動物名と言うのは不適であつて、所謂ツルである。後に述べるが如くツル地名分布地域とコバ地域分布地域とが熊本縣南部にて交叉するため混血して

生じたのである。地形に関する文字を附するものは15%, 中でも平コバが最も多い。その他に目立つて多いのは内コバ(内木場5, 内畑2)であるがその意味はよく解らない。

コバ地名の分布を見るに次の2点が注目せられる。先づコバ地名の分布はツル地名のそれに対して極めて対蹠的である。即ちツルは九州の胴体部、殊に豊後水道側の東部九州に多いのに対して、コバは西部九州、即ち黄海側の半島、島嶼に分布している。次にコバ地名は極めてまとまりある分布を示し、綺麗な帯状をなして九州西岸地方に分布している。文字による分布を見るに木場は廣く全般に見出され、古場と木庭とは北部を占め、小場と畑とは南部を占める。

3 ムタ地名 ムタ地名と言えば直に大牟田市を思い浮べるが、九州では極めて多い地名である。九州全土の 1:50,000 の地形図上でムタ地名は126ある。牟田92, 無田33, 牟多1である。ムタとは今日では北九州方面に残る言葉で、ぬかるみの田、沼田を指す。併しムタ地名の多くについて考えて見るのに元來の意味は田と言うのと大差ないようである。牟多と書くのは川内図幅(鹿兒島)に牟多田なる地名が唯一つ見当るのみである。恐らく田の字の重複を避けるために強いて牟多としたものであろう。無田を文字の上から忠実に解釋すると元來のムタの意味とは逆になる。八町無田(佐賀)千町無田(久住)など文字のみから解釈すると間違い易い。

ムタと言うのみの單獨地名は全体の12%を占める。上中下を附するものは9%, 東西南北を附するものも9%を占める。ツルの場合もコバの場合も上中下に比して東西南北ははるかに少なかつたがムタの場合は同率である。これはム

第 3 圖

タが有明海の北から東に沿う九州では最も廣い平野地方を主たる分布地域とし、水路が網狀に錯綜する地域であるから東西南北による方が便利な場合が多いからであろう。大小を附するものは全体の6%、この中には大牟田市も含まれる。植物名を附するものは17%に当り、ツルやコバの場合に比してはるかに多い。これは菅ムタが特に多いためである。これに次で蘭ムタが多い。動物名を附するものは鹿牟田(山鹿)、猪牟田(森)の二つに過ぎない。地勢に関する文字を附するものは24%を占める。ツルやコバに比してはるかに多い。これは地勢に関する文字と見做しては不適かも知れないが井の字を附するもの即ち井牟田・井無田が殊に多いからである。伊牟田・伊無田も井の字の轉じたものではあるまいかと思われる。

ムタの主な分布は佐賀平野・筑紫平野・熊本より南九州一帯である。その分布の中心線を引くならば九州胴体部の西側の大平野を縦に連ねた線となる。文字についての分布を見るに牟田は殆ど全分布地域にわたるが、無田は分布上或る程度のまとまりを示している。その主たる分布線はツルの場合にも述べた白杵から水俣にかけて中九州を斜に横切り、九州山脈と阿蘇火地帯とを境する土地構造線上である。

4 コガ地名 コガとは元來の意味は何を指すものか私にはよく解らない。とにかく佐賀平野・筑紫平野・熊本平野と言つた九州でも最も大きい水田地方に多い地名である。九州全土でコガ地名は102ある。文字としては古賀57, 古閑11, 小賀2, 古家1である。コガなる單獨地名は全体の37%を占め、その比率は特に他よりも高い。上中下を附するものは14%を占めるが、中コガは殆どない。大小を附するものは皆無で、これが他の4地名と相違する特色である。東西南北を附するも

第 4 圖

のは11%を占め他のものに比してその比率が高い。コガが廣い水田平野の地名であるところからムクの場合と同様に東西南北にすることが便利なためであろう。植物名・動物名を附するものが極めて少いのも一つの特色である。地勢に関する文字を附するものは15%を占める。この場合原(ハル)を附するものが最も多い。ハルコガ或いはコガバルである。其の他として比較的が多いのは今コガである。

コガは比較的によくまとまつた分布を示している。即ち佐賀・筑紫・熊本の三大平野である。南九州にはなく、北九州でも東部と西部になくて、中央部の平野地方に限られている。また文字的にも明瞭に分布上のまとまりを示している。即ち佐賀・福岡縣では古賀が当てられ、熊本縣では古閑が当てられている。

5 **ハエ地名** ハエ地名は九州山脈から霧島火山地域にかけての南九州に於いて然も極めて山深い谷間に多く見られる地名である。ハエの意味も私にはよく解らない。九州全土で求め得たハエ地名の総数は59である。八重57, 生2である。四國伊豫の海岸地方にもハエ地名が見当るが文字は磐であり、場所の性質も全く異なるからこれは別種のもではあるまいかと思う。

ハエなる單獨の地名は全体の14%, 上中下を附するものは8%, 東西南北を附するものはない。大小を附するものは5%。尤も大バエはなくて小バエのみである。併し尾バエが多くこれを小バエと同種と考えて加算するならば12%となる。植物名を附するものは19%を占める。併し桑ヅル・菅ムクのように特に目立つものはない。動物名を附するものは5%, 地勢に関する文字を附するものは14%である。

ハエ地名の分布は南九州の宮崎縣・鹿兒縣及び熊本縣南部に限られる。地勢的には九州山脈と霧島火山に屬する地域で、ツルの場合の水流字と全く同様な分布を示し、共に臼杵から水俣にかけての土地構造線によつて明確に区切られる。またこの線によつてコガ地名の分布地域とハエ地名の分

布地域もはつきりと境せられる。

6 九州全土に互る 1:50,000 の地形図上で調査したツル・コバ・ムタ・コガ・ハエの5地名について其の文字上の構成を数的に整理すれば表の如くである。地名の総数はツルが最も多く、コバ・ムタ・コガの順序に従つて少くなりハエが最も少く、文字の種類数も亦概ねそうである。単独地名

の割合はコバとコガとが特に多い。コバは山地地名を代表するものであり、コガは平野地名を代表するものである。常識的には聚落が粗に分布する山地では単独に名が多く、密に集る平野では少いと一應は考えられるが実際に於いては一概に左様とも言えない。

	ツル	コバ	ムタ	コガ	ハエ
地名総数	253	147	127	102	59
文字種類	9	5	2	4	2
単独地名	14%	33%	12%	37%	14%
上中下を附するもの	18%	10%	9%	14%	8%
大小を附するもの	8%	5%	—	6%	12%
東西南北を附するもの	3%	3%	9%	11%	—
植物名を附するもの	12%	9%	17%	2%	19%
動物名を附するもの	—	—	2%	—	5%
地勢に関する文字を附するもの	17%	15%	24%	15%	14%
耕牧地に関する文字を附するもの	8%	1%	3%	—	—
その他の文字を附するもの	24%	24%	18%	21%	28%

5 地名各々のうちツルの場合は上中下を附するもの、コバ・ムタ・コガの場合は地勢に関する文字を附するもの、ハエの場合は植物名を附するものが最も多い。附加文字の分類から云えば、上中下を附するものゝ比率はツルが最も高く、大小を附するものの割合はハエが最も高く（尾バエを小バエに合算）、東西南北を附するものはコガが最も多い。その理由はいづれも前述の通りである。植物名を

第 5 圖

附する割合はハエが最も高い。ハエの場合は桑ヅル、菅ムタの如く特に多いと言うものはなくて松・竹・楠・橘・芋等雑多な植物名を附している。

5 地名について比較的によく現われる植物名は表の如くである。

動物名を附するものは5地名ともに少い。動物名としては牛・鹿・猪・鶴・鷹等である。この中でも鶴は所謂ツルであつて動物名に加えることは不適當である。地勢に関する文字を附するものとしては5地名中でもムタ

	ツル	コバ	ムタ	コガ	ハエ
桑	11	3	—	—	—
松	2	1	—	1	3
竹	1	2	—	—	1

が最も多い。これは前にも述べた如く井ムタが特に多いからである。地勢に関する文字として5地名に附せられている主たるものを挙げれば表の如くである。

特に多いのは平と原（ハル）で平コバと原コバが目立つて多い。耕牧地に関する文字を附するものとしてはツル田が著しく多く他は極めて僅かである。

	ツル	コバ	ムタ	コガ	ハエ
崎	1	1	—	1	—
山	1	4	—	2	1
原	3	—	3	7	2
迫	2	1	—	—	2
野	4	1	—	1	—
平	1	8	3	—	5

7 ツル地名は廣く九州の胴体部に分布するがその中心線は東九州から南九州に引かれる。これに対してコバ地名は対馬から肥前

半島・天草島・薩摩半島と引いた線上、即ち西九州の半島、島嶼に於いて綺麗に縦に帶狀に分布する。若し飛躍が許されるならばゴバ地名と共に大陸から西九州の海岸沿いに火田作の流れがあつたと論じたいところである。

ツルの分布とコバの分布とは北九州では全く対立的であつて、ツル地名の見られるところにはなく、コバ地名の見られるところにはツル地名はない。ツルとコバの両地名の分布地域の中に、或いは中間と言うよりは両地域に跨つて、即ち有明海より八代海の東側の平野地方を縦に連ねてムタ地名が分布している。ツル・コバ・ムタの3地名ともに南九州ではその分布が重なる。即ち3地名は北九州では東・中・西を夫々代表し、西九州では3

者合体する。コガ地名はムタ地名分布の北半分と重なる。即ち有明海の北から東に沿う佐賀平野・筑紫平野・熊本平野に分布する。ハエ地名はツル地名の分布の南半分と重なる。即ち九州山脈・霧島火山地域に分布する。以上の5地名の分布から見て5地名全部が重なるのは熊本縣南部である。例えば砥用図幅では小鶴・古閑・沢無田・木場・生（ハエ）と5地名全部が1枚の図幅中に含まれている。この図幅の南に接する頭地及び日奈久の2枚の図幅からはツル地名3，コバ地名3，ムタ地名4，ハエ地名2が数えられる。九州に於ける地名の分布の研究に当つて最も興味の深いのは熊本縣の南部，即ち人吉盆地附近である。

次に九州の胴体部を斜に横切る地体構造線が地名の分布に対しても可成りの意義を有することを重ねて強調したい。この構造線に沿う低地は古くから東九州と西九州を結ぶ重要な通路であつたらしく、この通路に沿つてツル地名は豊後から肥後へ、ムタ地名は肥後から豊後へ流れたかの如き分布状態を示している。またこの構造線を境として南北に於いて地勢が著しく相違せしめられている。即ち北は原野の廣い火山地域であり、南は極めて山深い壯年期の褶曲山脈の地域である。このことが長い九州の過去の歴史に於いて相当の境界的な意義を有したものと推察せられる。水流、無田については先に述べたが、コバ地名の場合にも古場と木庭とはこの線より北に於いて、小場と畑とは南に於いて見られる。コガ地名とハエ地名についてもこの線が両者の分布の境界線をなしているのである。（長崎大学）

人 文 地 理 新 書				A 5 判 横 組 各冊 120—150頁 豫 價 100 円		
1 人間と環境	辻田右左男	6月刊行	5 商業と交通	織田 武雄	11月刊行	
2 人口と集落	藤岡謙二郎	5月刊行	6 日本の國土	帷子 二郎	10月刊行	
3 農業と牧畜	山口平四郎 谷岡 武雄 河野 通博	7月刊行	7 世界の 諸地域	上 山口平四郎 岩田 慶治	10月刊行	
4 地下資源 と工業	今村新太郎 西村 睦男 河地 貴一	9月刊行	8 世界の 諸地域	下 今村新太郎 水津 一朗	12月刊行	
柳 原 書 店						

Place Names in Kyushu.

By Tadao Kondo

Place names are so closely connected with topography that it is very interesting to investigate them by means of the maps.

Place name of "Tsuru".....Many of them are found in Kyushu especially. There are 258 names on the topographical map of 1/50,000. Originally it means an alluvial plain on the river. When number of settlements was a few, simple name of "Tsuru" can be distinguished from each other. But as the plain has developed, other words were added to "Tsuru" to distinguish itself from others. These surfaced-words were "ue"(upper) "naka" (middle) and "shimo" (lower)(18% of the whole added word), "higashi" (east) "minami" (south), "nishi" (west) and "kita" (north)(3%), "dai" (greater) "ko" (smaller)(6%), name of plantation (12%), name of animal (rare), those words referring to topography (slope, between the rivers, river, cape, hill). They are found mainly in Oita and Miyazaki Prefecture and also in Fukuoka, Kumamoto and Kagoshima Prefecture. That is, they are found in the central part of Kyushu, especially on the eastern side of it, facing to the Bungo Straight.

Place name of "Koba"..... It means the cultivated land in the forest. There are 147 names on the topographical map of 1/50,000. In Tsushima Isl, the mountain agriculture is called "Kobazukuri"(burning cultivation) and it makes us infer that this place name is related to the mountain agriculture in Kyushu before Meiji Era. Like the place name of "Tsuru", in general, an additional word was connected with "Koba" to make a compound word. They are distributed in a group in eastern Kyushu. But its predominant area is different from that of "Tsuru". The place name of "Tsurukoba" is found also in the southern Kumamoto prefecture, connecting with the area of "Tsuru".

Place name of "Muta"125 names on the 1/50,000 topographical map. They are distributed in Saga Prefecture, the Tsukushi Plain, the Kumamoto Plain and southern part of Kyushu, that is, between the "Tsuru" area and the "Koba" area in both districts. It means a marshland originally, but at present time those places do not always keep the original characteristic of this name. Additional words are "upper", "middle" and "lower" and "east", "south", "west" and "north", which are found at the same percent(9%) of the total. Here the place name of "Tsuru" and "Koba" are also mixed, but they scarcely added "east", "south", "west" and "north" as the additional words. This is because the place name of "Muta" is much found on the largest plains in Kyushu stretching eastwards from north of the Ariake Bay where water ways are diversified and formed net-like landscape.

人 文 地 理 第2巻 第3号 予 告

論 説

- 大運河沿岸の都市形態……………須 藤 賢
 農地解放と山村経済……………田 中 豊 治
 東シベリアの乾燥タイガ……………川 喜 田 二 郎
 保倉川旧河道路の中世開発新田……………龍 瀬 良 明
 大都市地域における都市群の研究……………小 林 博

短 報

- 南のはての自然村……………今 西 錦 司
 木材町としての櫻井町……………松 田 勇 治

資 料

- パキスタン (西村陸男)
 奈良盆地における用水路の地理的研究 (堀内義隆)
 生活気候学序説 (関口武・大橋一雄)
 栽培作物の地域的競合 (岸本実)
 北米土着文化による地域区分 (水津一郎)

展 望

- P. S. マルテン、G. I. クインビー、O. コリアー共著『コロンブス以前の
 インデアン』……………近 藤 義 郎